

## 短歌の「朗読」、音声表現をめぐって（1）朗読・朗詠・披講とは

「歌壇で近頃流行るもの」の一つとして「朗読」がしばしば話題になっている。最近の短歌雑誌では、つぎの特集が目についた。

- ①特集「体験的朗詠・朗読・絶叫の魅力」（『短歌往来』二〇〇〇年一〇月）
- ②特別企画「朗読の魅力を探る」（『歌壇』二〇〇四年六月）
- ③特集「音読して心に残る短歌」（『短歌』二〇〇七年三月）

短歌の世界には、すでに「朗詠」という音声表現があり、正月のテレビでもなじみとなった、独特の節回しによる歌会始での「披講」というものもある。披講の歴史や実態は、最近『和歌を歌う一歌会始と和歌披講』（日本文化財団編 笠間書院二〇〇五年）が出て、かなりの内実がわかるようになった。また、「朗詠」は「十世紀前半以降までに成立した歌謡の一種で、もっぱら『漢詩文』に節をつけて吟誦するもの」で、「和歌の朗詠」の歴史は近年にできた新しい言い方であるという（青柳隆志「朗詠と披講について」上記『和歌を歌う』所収）。

朗詠とも、もちろん披講とも異なる、福島泰樹の絶叫短歌と吉岡しげ美の与謝野晶子の短歌の弾き語りを聴いたことがある。いずれも三十年以上の実績をもち、音楽性とタレント性が高いので、これらのエンターテインメントとは一線を画することにして、「短歌の朗読」の魅力と問題点を探ってみたい。そして、その歴史にみる危うさにも迫ってみたい。

朗読の体験者たちは次のように語る。岡井隆の朗読は（一）さりりとした口調（二）自作、できれば新作の連作（三）基調の文語を聞くだけで分からせる工夫、を念頭に一九九八年あたりから始めたという（「朗読する歌人たち」①所収）。穂村弘は、作者が自作を読むことによって「一人の人間の総体としての魅力や存在感のようなもの」が示され、発見するところは大きい、という（『人間力』が分かってしまう）①）。ニューヨークでの朗読体験を持つ石井辰彦は、短歌の朗読によって、その「音楽性」が再認識でき、短歌の「解釈」の可能性を広げることできることを強調する（「義務の楽しみ」①）。そして、吉村実紀恵は「言葉と空間、あるいは言葉と肉体のリンクによって生み出される短歌の新しい可能性」を観客とともに体感できるという（「町を出る歌人は出会いをつくる」①）。さらに、もっと若い世代の黒瀬珂爛は「朗読者と観客空間との融和がもたらす空間宰領に短歌の朗読の特殊性」を見出し、「定型音読が本来持つ（同時に嵌りやすい陥穽としての空虚な）、『心地よさ』を越えた、朗読の核を空間から引き出す」のではないかと指摘する（「朗読、その空間」②）。さらに、彼は「こえにだしてよんでみると、いみはわからなくてもきもちがいい」という谷川俊太郎の発言（『詩ってなんだろう』筑摩書房二〇〇一年）と辺見庸の「押しつけがましい情緒」と言えるこの「気持ちよさ」こそが「国民士気の昂揚」という国策に沿った「詩歌朗読運動」を促進した、戦前・戦中期を忘れてはならない（『永遠の不服従のために』毎日新聞社二〇〇二年）という発言を紹介する。黒瀬は、現代の短歌朗読とかつての「詩歌朗読運動」とは完全に次元をことにすると断言しつつも「情緒」の魅惑、陶醉感から抜け出せないことも否定はしない（ウェブマガジン『ちゃばしら』二〇〇四年九月）。この黒瀬の指摘は重要で、私もかねがね現代の「短歌朗読」とかつての「朗読運動」に通底するところがほんとうにないのかが、気になっていた。戦前・戦中期の詩などの朗読運動についての優れた先行研究にならって、「短歌朗読」の歴史をたどりたい。（『ポトナム』2008年3月号所収）